

第25回 特別展 解説書

「石鎚山の生物展」



面河山岳博物館

1996年7月1日～9月1日

第25回特別展「石鎚山の生物展」によせて

石鎚山系に生息している動植物は5,000種類を越えるといわれ、四国随一の生物の宝庫といえます。とりわけ面河溪谷～面河山や土小屋～天狗岳～堂ヶ森への登山道沿いにみられる植生は自然林として学術的に貴重で、暖温帯林（ウラジロガシ林）、中間温帯林（モミ・ツガ林）、冷温帯林（ウラジロモミ林・ブナ林）、亜寒帯林（シラベ林）へと垂直的に移行し、この多様な原生林に生息する生物もまた様々です。

また同山系の生物については古くから研究が盛んで、分布や生態などが解明されていますが、まだまだ未知の分野が残されており、「謎解きのような魅力」が研究者をはなしません。

このたび面河山岳博物館では平成2年の開館準備期から現在までにかけて収集した動植物を一挙に初公開します。

石鎚山の生物を通じて自然の大切さを楽しく学んでいただければ幸いです。

面河山岳博物館

石鎚山の森林植物

石鎚山は西日本最高峰の山で、標高1,982m。植物の垂直分布は低山帯から亜高山帯にまで及んでいますから種類は多く、シダ類と種子植物は1,200種を越えるといわれています。石鎚山の森林植物を別の角度から見た特徴をいくつかとりあげてみましょう。

1, 面河・石鎚山が原産となっている種類

この山域で最初に発見され、新種として記載された植物としては、35種類以上のものがあります。また、これらの植物の和名には採取された地名が含まれていることが多くあります。

イシツチの名を持つものには、イシツチウスバアザミ、イシツチザクラ、イシツチボウフウ、イシツチテンナンショウ、イシツチコゴメグサなど。

オモゴの名を持つものには、オモゴテンナンショウ、オモゴキイチゴ、オモゴハイノキなど。

2, 高山性植物の種類

石鎚山は日本列島の位置から見れば「南国南部の四国」で、標高2,500m以上とされる日本中部山岳帯・高山部に比べるとかなり低いといえます。しかしそれでも西日本最高峰、純粋な高山植物は少ないのですが、亜高山帯に生育する高山性植物がかなり見られます。

シダ類：サカゲイノデ、シラネワラビ、ヒメスギラン、ミヤマウラボシなど

裸子植物：コメツガ、シラベ

双子葉類：アカモノ、イシツチカラマツ、イシツチザクラ、シコクフウロ、イワキンバイ、オオカメノキ、オオトウヒレン、コウスユキソウ、ナナカマド、ミソガワソウ、ユキワリソウ、ハリブキ、タカネニガナなど

単子葉類：イワノガリヤス、キソチドリ、シコクヒロハテンナンショウ、バイケイソウ、ハコネハナゼキショウ、ヒメスゲ、マイヅルソウなど

3, 石鎚山で固有な植物

この山域にしか見られない植物は、オモゴキイチゴ、イシツチキイチゴ、エダウチミヤマタニタデ、イシツチノダケ、イシツチドウダン、オモゴハイノキ

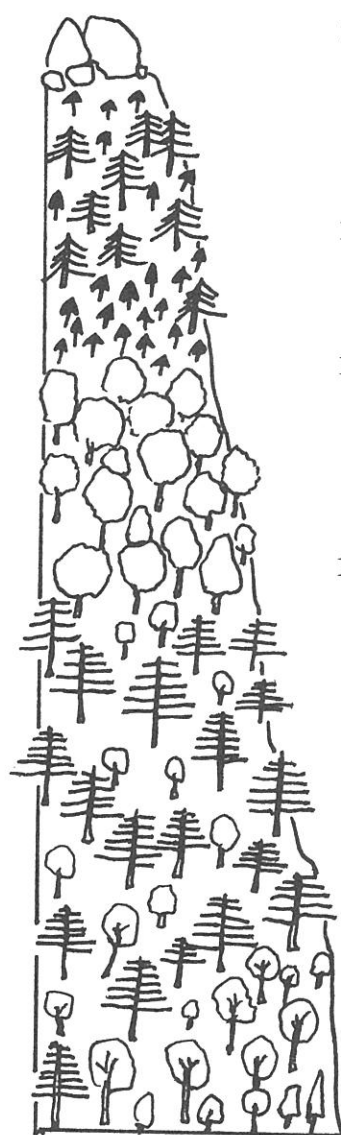
4, そはやき要素の種類

そはやき（襲・速・紀）要素の植物とは、温暖な第三紀（約6,500万年前～）以降、本州の東海以西・四国・九州の中央構造線より南の地域にわたる一連の分布をなす植物のことです。第三紀以来の遺存植物は石鎚山では29種類が報告されています。

ウラジロモミ、ハリモミ、コウヤマキ、ナガバイラクサ、チャボツメレンゲ
アワモリショウマ、ギンバイソウ、バイカアマチャ、オンツツジなど

5, 石鎚山の森林の垂直分布

石鎚山は標高差が著しいため、気候の違いも大きく地形も急峻で複雑です。
これを受けて森林植生も多様であり、高山帯及び亜熱帯を除けば日本の主な植
生が見られます。例えば同じ緯度の山でも高度が100m上昇するごとに、温度は
0.5~0.6℃ずつ下がるため、低地と高山とでは相当の温度差が生じます。



標高 (m)	地 名	気 候 帯	群 落
2,000	天狗岳	亜寒帯林	シラベ群落 (ササ原、 ダケカンバ林)
1,700	愛大小屋	冷温帯林	ブナ林 ウラジロモミ 林
1,500	土小屋		
1,200	展望台	中間温帯林	モミ・ツガ 林
700	関門	暖温帯林	ウラジロガシ 林 スギ・ヒノキ 植林
500	渋草		

面河・石鎚の哺乳類

石鎚山系にはタヌキやイノシシなどのほかにネズミやコウモリなどの小動物も多く生息しています。また、明治には比較的多かったツキノワグマとニホンカモシカについては戦後に絶滅しています。

ヤマネ

特別天然記念物。「キネズミ」ともよばれ、体温を摂氏0度近くまで下げて冬眠することでお名です。面河周辺でも冬眠のために民家の布団の中にもぐり込んでいるところを発見された例がいくつかあります。体長8cmで木の実や小昆虫などを食べています。

モモンガ

ムササビ

モモンガは前足と後ろ足の間に飛膜があり、木の上から空することで知られています。また、モモンガよりも大型のムササビも生息しています。この2種類はリス科に属しドングリや木の芽、小昆虫などを食べています。モモンガは体長約15cm北方系の種類で愛媛県内では面河村のほかに小田町や新宮村から報告があります。反対にムササビは体長約40cmの南方系の種類で、その分布はリスに似ています。スギやヒノキに害を与えることが知られています。

よく似た3びき

タヌキ・アナグマ・ハクビシンの3種類はごく普通に見られ、夕刻から人里にもやってきて残飯あさりをしているのを見ることがあります。本来、これらの獣は野ネズミや野ウサギの天敵となっています。また、ハクビシンは「白鼻心」と書き、鼻筋が白いことが特徴です。もともと日本にいない動物でしたが、南方より人間によって持ち込まれたものが繁殖したものと考えられています。

コウモリ

コウモリは四国で初記録の種類が見つっています。日本特産種のモリアブラコウモリやウサギコウモリ、九州から知られていたノレンコウモリなど、8種類が記録されています。

そのほか、キツネ、ノウサギ、リス、イタチなどがみられ、リスについては15、6年前からシイタケに被害を与えるとして知られています。また、高山性のヒメヒミズモグラやササ原にトンネルを掘って生活をしているスミスネズミ（スミスという名前は発見者のイギリス人の名前に由来しています）、シコクヒミズモグラなどの珍しい動物も生息しています。



面河・石鎚の鳥たち



日本には555種類の鳥類が記録されています。このうち、面河・石鎚では年間約80種類の鳥をみることができます。しかし、1年中これらの鳥たちをみることにはできません。渡り鳥という言葉をよく耳にしますが、夏や冬など訪れる季節によってこれら渡り鳥を区別しています。その語句の説明からはじめましょう。

1. 留鳥(りゅうちょう)

ある地域で一年中生活し、季節によって移動しない鳥のこと。

2. 夏鳥(なつどり)

春から秋にかけて、南方から渡ってきて子育てをし、秋に南に去ってゆく鳥。

3. 冬鳥(ふゆどり)

秋から冬にかけて、北方から渡ってきて冬を越し、春に北へ去ってゆく鳥。

4. 渡り鳥(わたりどり)

繁殖地と越冬地の間を、季節によって定期的に移動する鳥のこと。つまり、夏鳥や冬鳥も渡り鳥といえます。

面河・石鎚の留鳥

一年中見ることのできる鳥は約45種類。身近にいる鳥たちがそうです。例えばハシブトガラス・コカワラヒワ・シジュウカラ・カワガラス・ウグイス・セグロセキレイ・カワセミ・キジバト・トビなど。

また、面白いことに平地でよくみかけるスズメやムクドリは生息していないようです。

面河・石鎚の夏鳥

初夏にもなると、あちらこちらで鳥のさえずりを聞くことができます。繁殖にやってきた鳥たちです。オオルリ・キビタキ・コマドリ・アカショウビン・ヨタカ・ホトトギス・カッコウ・ジュウイチなど。約25種が記録されています。

また、日本ではさえずりの最も美しい3種の鳥を「三鳴鳥=さんめいちょう」といい庶民にも親しまれてきました。この3つの鳥はウグイス・オオルリ・コマドリで、夏にはこのすべての声を聞くことができます。

面河・石鎚の冬鳥

冬にはウソ・アオジ・ジョウビタキ・ミヤマホオジロなどがやってきます。約15種が記録されています。松山あたりではカモなどの水鳥が渡ってきますが、この周辺には池などが少ないためカモやサギなどの種類は少ないといえます。

日本特産種

日本国内でのみ見られる鳥たちがいることをご存じですか？

面河・石鎚山系で見られる日本特産種はキジ・ヤマドリ・カヤクグリ・アオゲラ・セグロセキレイの5種類です。カヤクグリは高山に生息しているため、石鎚山登山の際に見かけることがあります。とても、地味な鳥です。

ききなし

鳥のさえずりを人間の言葉にいいあらわしたものです。複雑な鳥の声もよくきけばこんなふうに聞こえるでしょう。

ホオジロ(留鳥)

サッポロラーメン、ミソラーメン

メジロ(留鳥)

長兵衛、中兵衛、長中兵衛

サンコウチョウ(夏鳥)

月、日、星ホイ・ホイ・ホイ

ツバメ(夏鳥)

土食うて、虫食うて口ちゃしぶーい

コジュケイ(留鳥)

チョットコイ・チョットコイ

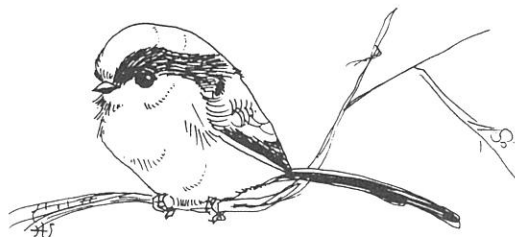
鳥の名と鳴き声

鳴き声その鳥の名前になっている種類もあります。とても覚えやすいですよ。

ジュウイチ、カッコウ、ホトトギス、コマドリ(馬のいななきに似ているから)など

石鎚山最強の鳥

日本に生息するタカの中で最も大きなクマタカがみられます。石鎚山系には標高500m以上に生息しており、その姿を見ることはめったにありません。現在では森林の減少によって生息地が狭くなり、個体数も減少しています。



石鎚山の爬虫類・両棲類

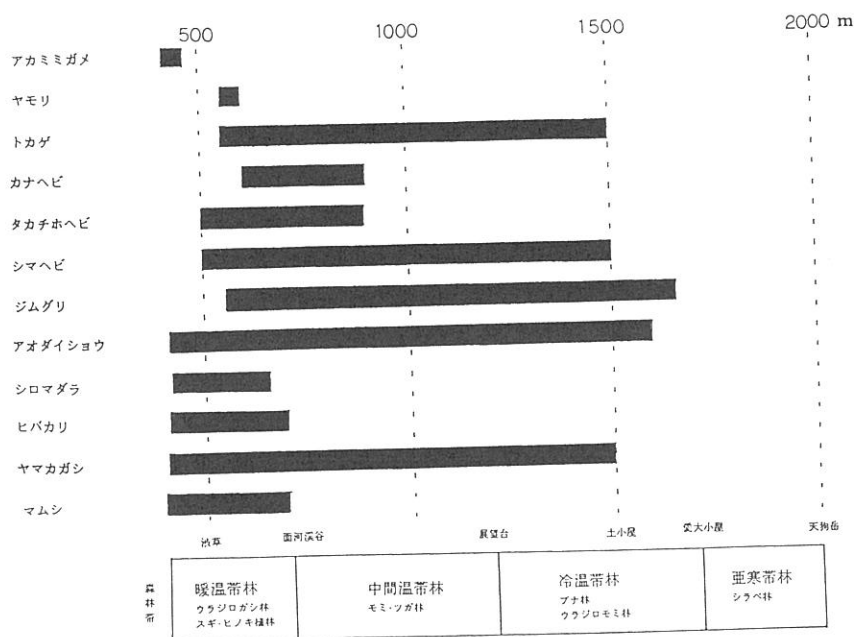
石鎚山南斜面に位置する面河村では、爬虫類12種、両棲類12種、計24種類が生息しています。この種類数は愛媛県全体で生息が確認されている爬虫類の60.0%、両棲類の66.7%にあたります。この地域の立地条件は殆ど山地で、止水や水田などは少ないため、平野部と比べて種類数・個体数の偏りがあるのが特徴です。

1, 爬虫類の仲間

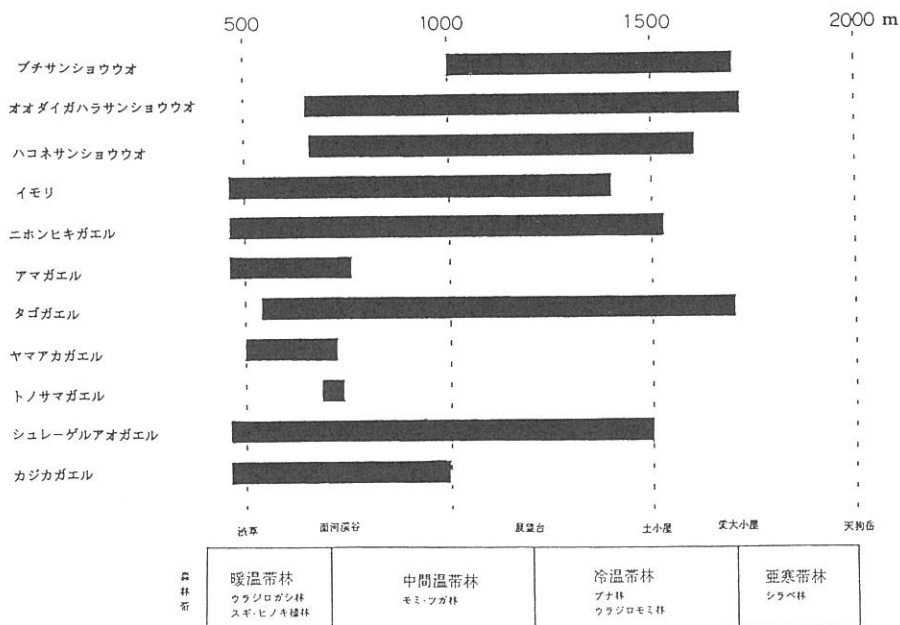
ヤモリ（家守）は民家などに棲みつき、夜間電灯の光のもとに現れ、昆虫などを食べます。個体数はきわめて少ないです。トカゲとカナヘビは日当たりのよい畑や林縁部の斜面などでみかけます。前者はスマートな尾とかさついた鱗、後者はずんぐりとした体と光沢ある鱗が特徴です。ヘビ類は8種類が生息しています。まず、タカチホヘビは、夜行性かつ土中生活のため人目につきにくいのですが、大成地区や面河溪では密度も高く生息数は多いようです。また噛みつくこともなくおとなしい性質のようです。シロマダラは同じく夜行性で、数例しか確認されていません。黒い斑紋が鮮やかな美しいヘビです。アオダイショウとシマヘビは集落部からスカイライン終点の土小屋くらいまでみられます。この地域では最も普通な種類でしょう。「地にモグる」ということからジムグリと名前がついたこのヘビは、最も垂直的に生息範囲が広く、石鎚山北壁下付近（標高約1,700m）までみられます。ヒバカリの名は噛まれると「その日ばかりの命」ということからきていますが、無毒です。集落部の湿地などに棲みますが、あまりみかけません。毒蛇として知られるのがヤマカガシとマムシです。両者もごく普通にみられますが、前者の方が低地から山地にかけて広く分布します。いずれも湿地や水辺に多いのですが、餌となるカエルなどが豊富な場所です。カメ類については生息がよく分かっていませんがアカミミガメの1例が確認されています。おそらくペットとして飼育していたものが逃げたのでしょう。

2, 両棲類の仲間

石鎚山には3種類のサンショウウオが棲んでいます。終戦後には7月のお山市に道中土産としてサンショウウオの乾燥もの（小児の疳の虫の妙薬）が売られていたことがありました。オオダイガハラサンショウウオは、全身が茄子紺色で、全長も15～20cmと大型です。石鎚山では標高1,000m以上の小沢にはたいてい幼生がみられるなど、比較的個体数は多いようです。ブチサンショウウオは前者よりも小型で、全長10cm程度ですが、暗褐色の地に黄金色の鮮やかな体色をしています。ハコネサンショウウオはスリムな体型で、全長15cm程度。オレンジ色の帯状斑点が特徴です。イモリは田圃に水が入る時期（5月）に出現します。面河溪や土小屋の止水域にもよくみられます。カエル類は8種が知られています。田圃や池にはアマガエル、シュレ-ゲルアオガエル、ツチガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ニホンヒキガエル（方言：ドバ、オンビキ）がみられます。なかでもニホンヒキガエルは最も生息範囲が広く山地にも多く棲みます。山地の伏流水にはタゴガエルが、河川にはカジカガエルがそれぞれ棲んでいます。カジカガエルの鳴き声は雄鹿に似て、「フィヨ、フィヨ、フィフィフィ…」という清涼感があります。



面河村における爬虫類の垂直分布



面河村における主な両棲類の垂直分布

面河・石鎚山の魚類

面河・石鎚山の豊かな自然を代表するものとして面河川水系の河川があげられます。同水系の魚類は20種類程度が生息していますが、純粋な淡水域に古くから生息するアマゴやイワメなどの在来種は一般的なものです。また面河ダムなどには北米産のブラックバスやニジマスが放流されています。ここでは代表的な魚類3種類を紹介します。

(1) アマゴ



方言：アメノウオ、アメ

石鎚山の溪流魚を代表する魚で、体側に朱色の斑点と鱗紋が鮮やかです。体長約20cm。アマゴは面河溪では御来光の滝下（標高約1,300m）から下流にかけて多く生息しています。

産卵は9月～11月にかけて、溯尻の砂礫底で行われます。面河川漁協では年々、数万匹の稚魚を溪流に放流しています。

(2) イワメ



個体数はきわめて少ない魚で、アマゴの突然変異とされています。生息地ではアマゴと混生しており、鉄砲石川では30：1の割合でイワメは圧倒的に少ないです。本種はアマゴと似ていますが斑紋がありません。

1995年7月、面河川では地元の方が釣り上げ、実に24年ぶりに姿を見せました。なお繁殖力はアマゴより弱いようです。

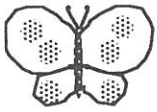
(3) ニジマス

方言：マス

アマゴと同様、溪流に生息しますがもともと北米が原産で、古くから放流されています。体側に赤紫色の帯が走り、黒色の斑紋が散在しているのが特徴です。体長は30～40cm程度ですが、養殖では60cm以上になることもあります。

冷水域に棲みますが、池でも飼育がたやすく、人工採卵も容易なため各地で養殖されています。産卵は12～3月までの冬の間にを行います。

面河溪の五色河原ではニジマスの放流による釣りが楽しめます。



面河・石鎚の虫たち



1. 面河・石鎚には約3,000種類の昆虫が生息していると考えられています。日本に生息している昆虫は約30,000種ですから、その10分の1を見ることができるのです。なぜ、こんなにたくさんの種類が生息しているのでしょうか?石鎚山系に生息する代表的な昆虫を紹介しましょう。

熱帯系の残留種

新生代第三紀(約4,000万年前)には石鎚周辺は今よりも温かい熱帯系の気候でした。そのころに栄えていた昆虫をいいます。その代表は四国、九州の限られた地域に生息しているツノクロツヤムシです。

北方系の種類

新生代第三紀から第四紀にかけておとずれた寒冷期には北方で生息している種類が南へ侵入してきました。そして、この環境に適応したと考えられています。日本の北に多く分布している種類です。

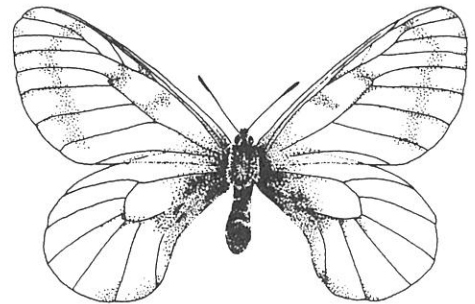
例えば キンスジコガネ、ツマジロウラジャノメ、ウスバシロチョウ、ヒゲナガカミキリなど。

南方系の種類

寒冷期の間には温暖な気候が訪れました。そのとき、南方で生息している種類が侵入してきたものと考えられている昆虫です。

例えば タツカタモクメシャチホコ、クロコノマチョウ、キスジゴキブリ、イッシキキモンカミキリなど。

石鎚山は標高が高いためさまざまな植物が分布しています。そのため、昆虫たちは自分の住む場所を選ぶことができます。ですから、北方系の種類は比較的標高の高いところに、南方系の種類は比較的低いところに分布しています。また、この面河溪でもこれら北方系と南方系の種をいっしょに見ることができ、とてもめずらしい環境といえるでしょう。



ウスバシロチョウ

上昇気流にのる昆虫

石鎚山の山頂付近では、低地に生息しているはずの昆虫をしばしば見かけることがあります。晴れた日などは上昇気流が発生しやすく、これらの昆虫はこの風によって山頂まで飛んでくるのです。

例えば キアゲハ、オオミドリシジミ、アオスジアゲハなど。

四国特産の昆虫

島国など隔離(かくり)された環境に長くいると、その環境に適応した形や色をしめすようになります。四国でも本州などと違った、四国ならではの昆虫が生息しています。

例えば イシヅチオサムシ、シコククロナガオサムシ、ヒサマツナガゴミムシ、シコクヒメハナカミキリ、チュウジョウヒメハナカミキリなど。

石鎚山には上昇気流に乗ってわざわざやってくる昆虫もいれば、四国・石鎚ならではの昆虫もいるのです。

2. 昆虫がたくさんいることはわかりました。では、どれくらいの種類があるのでしょうか?調査の進んでいる昆虫群について紹介しましょう。

チョウの仲間

面河・石鎚には約100種類のチョウが生息しています。そのなかでも、ミドリシジミの仲間はチョウの宝石ともよばれ、その翅の色は緑に輝き、人々を魅了(みりょう)してやまない美しいチョウです。また、日本特産種であるヒサマツミドリシジミ・サトキマダラヒカゲ・メスアカミドリシジミなどや平地に住んでいるごく普通のナミアゲハ・ベニシジミ、日本の国蝶に指定されているオオムラサキも見ることができます。

ガの仲間

600種類をこえるガが生息しており、石鎚山系はガの宝庫としても知られています。特に北方系のガは多く、エゾヨツメ・ヒメヤママユ・コトラガ・キンイロキリガ・クシヒゲシャチホコ・ウスベニトガリバ・フタテンツトガなどが見られます。そのほか、昼間に活動するキンモンガ・ウスバツバメガ・アゲハモドキ・イカリモンガなどが花などにやってくる様はまるで、チョウのようです。

クワガタの仲間

クワガタは11種類が生息しています。ミヤマクワガタ・ノコギリクワガタ・アカアシクワガタなどは、よくご存じでしょう。残念ながらオオクワガタは生息していませんが、ニセコリクワガタやマダラクワガタ・ツヤハダクワガタなどの小さな珍しいクワガタを見ることができます。また、クワガタにちかいグループのツノクロツヤムシは親虫が子育てをすることでよく知られています。朽ち木の中で一生のほとんどを過ごすこの虫は親虫が幼虫のために朽ち木をかみ碎いて食べやすくするため、親虫だけをとってしまうと幼虫は朽ち木を食べることができずに死んでしまうのです。

トンボの仲間

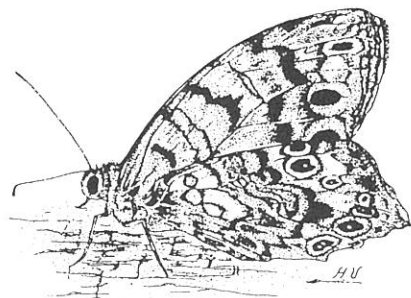
トンボの仲間はあまり多くなく、27種類が生息しています。トンボの幼虫はヤゴといい、水の中にすんでいます。面河・石鎚周辺には川が多く、流れを好む種類が多く生息しており、全体の約半分である13種がこの渓流性のトンボなのです。四国特産種であるシコクトゲオトンボや中生代(1億8千万年前)の生き残りとして知られているムカシトンボの姿を見ることができます。

セミの仲間

セミは種類が多く13種類が生息しています。セミといえば夏を連想しますが、面河溪では5月下旬からハルゼミが鳴きはじめます。6月に入れば、エゾハルゼミの「ミョーキン・ミョーキン・ケ・ケ・ケ」といった奇妙な鳴き声を聞くことができます。また、「チッ・チッ・チッ」と鳴く体長約2センチの小さなチッチゼミの声を面河溪パノラマ台周辺で聞くことができるでしょう。

コガネムシの仲間

面河・石鎚には約70種類のコガネムシが生息しています。樹液や花によく集まります。緑色の美しいアオカナブンやみんなの大好きなカブトムシをはじめシコクコフキコガネや熱帯系の遺存種であるオオダイセマダラコガネなども生息しています。また、オオチャイロハナムグリは独特のにおいをもっており、標本箱に1頭入れておくと、箱の中がこのにおいでいっぱいになるという面白い種類もあります。



☆特別展会期☆ 1996年7月1日～9月1日

面河山岳博物館 第25回特別展
「石鎚山の生物展」解説書

編集発行 面河山岳博物館
発行日 1996年7月1日
印刷所 (株)メディックス